

地域に開かれた演劇の場で、 生きる力を伝える



“子どもに見せたい舞台”
今年「ドリトル先生と動物たち」だよ！



上:左から陽さん、友井さん、佐々木さん、米原さん、一色さん、渋谷さん、蓮池さん。演劇だけでなく、多くのアーティストの作品を紹介することにも力を注いでいる。

愛知県で障がい者の社会進出を実践する「中華茶房うんぷう」から東京に戻ったオイラ。今回出会ったのは、豊島区の廃校を利用して演劇など幅広いイベントのプロデュースを行う「にしすがも創造舎」を運営するNPO法人アートネットワーク・ジャパン（ANJ）代表の蓮池奈緒子さんだ。「開かれた職場」から「開かれた演劇の場」へ、オイラの旅はつながっていったんだ。



古い中学校が劇場 に生まれ変わる

西巣鴨の駅を出てすぐ、オイラがたどりついた「にしすがも創造舎」。緑の多い広い校庭と校舎——どう見ても普通の中学校だけど、あれ、大きな体育館から動物の格好をした人が出てくるぞ、どうなってるの!?! 「びっくりさせたわね、クロッチ。あれは舞台に出演する役者さん。ここは200人を収容する劇場でもあるのよ。私たちは豊島区と協力しながら閉校した中学校を拠点に演劇やアートを地域の皆さんに発信して

いるのよ」と蓮池奈緒子さんは笑いながらオイラを迎えた。
へエ、どうして中学校が劇場になったの? 「私は大学で演劇を学び、卒業後も劇団に関わって国内外の演劇作品を制作する仕事をしてきたの。2000年には当時のポストと一緒にNPO法人アートネットワーク・ジャパンを立ち上げたのだけど、まずは拠点が必要でしょ? 当時、廃校となった中学校を民間と協力して活用したいと考えていた豊島区の皆さんと出会い、ここ旧朝日中学校を無償で借りたのが2004年8月のこと。」

でも、どんな人がここを利用して
いるの? 「世界的な舞台演出家の
蜷川幸雄さんが、稽古場として体育

NPO法人アートネットワーク・ジャパン（ANJ）
代表の蓮池奈緒子さん。

館独特の広い空間を気に入ってくださったの。でも、稽古場だけでなく劇場にしたい、ここで舞台を観てもらおうと夢が広がって、助成金や稽古場運営での収入で舞台機構を整え、ようやく2005年から「にしすがも創造舎演劇上演プロジェクト」をスタートしたのよ。」



過去と未来をつなぐ アートプロジェクト

ねえ、衣装も豪華で役者さんたちが演奏したり、楽しくて時間を忘れちゃったよ。蓮池さんの厚意でオイ



撮影：飯田研紀

© 2012年「ドリトル先生と動物たち」
公演期間：2012年8月10日～16日
会場：あうるすぽっと
（豊島区立舞台芸術交流センター）

「にしすがもアート夏まつり」では演劇を観るだけでなく、登場する動物キャラクターを考えるワークショップなど、子どもたちが参加する楽しさを知る機会を大切にしている。

ラは公演の通し稽古を見せてもらったんだ。オイラには初めてのお芝居体験だ。「クロッチに観てもらったのは、子どもに見せたい舞台」シリーズの一つ。私たちが2007年からスタートした「にしすがもアート夏まつり」ではメインプロジェクトとして『オズの魔法使い』『ピノッキオ』『青い鳥』など名作を脚色した舞台を上演しているの。子どもたちや親御さん、お祖父ちゃんと3世代でいらっしゃるご家族も、クロッチと同じように初めて芝居を観る方も大勢いらしたけれど、今はさまざまなワークショップも含めて皆さん楽しみにしてくださっているのよ。」

「子どもに見せたい舞台」かあ。いいねえ。それが蓮池さんが目指すものだったんだね? 「実はね、クロッチ、最初はそうではなかったの。とにかく演劇をやりたい、若手演劇人を育成する場を創りたい一心でスタートしたのよ。でも、徐々に自分たちが地域にどういう貢献ができるのか考えるようになったの。地域の皆さんが大切な思い出を持つ学校という場所、未来に生きる子どもたち、そしてご高齢の皆さんも交流でき



演劇の力を 全国に広げたい

るアートプロジェクトを行うことが、ここで活動する上で重要だと考えるようになったのよ。」

2012年夏は西巣鴨での上演をお休みして「ドリトル先生と動物たち」を池袋の劇場で上演するそうだけれど? 「そうね、多くの地域の子どもや親御さんに、にしすがもの体育館の劇場以外でも私たちの作品を観ていただきたい、と思うようになったからなの」と蓮池さんは語った。

「子どもに見せたい舞台」は2011年までで5作品、演出家・倉迫康史さんを中心にプロの役者さんがユニットを組み、子どもだけでなく大人の鑑賞にも耐える質の高い舞台を提供してきたと自負しているの。演じる役者さんにとっても演じがいのある場へと成長してきたと感じているのよ。うん、

オイラも舞台を観て、なんだか頑張ろうって気持ちになったよ。

「演劇の力というのはね、少し難しくいうと、日常生活に内在する問題を気づかせる」こと、そして生きる力を人々に与えることだと思ふの。『オズの魔法使い』の主人公ドロシーはブリキや案山子の仲間たちとたくさんの困難に出会うけれど、けっしてあきらめずに旅を続けるでしょ。子どもに見せたい舞台」では主人公たちが皆それぞれに困難に出会いながら勇気を持って前進する、「生きる力」を伝えてくれる点が共通すると感じているわ。これからは「にしすがも創造舎」は幅広くアートの力で地域に貢献していきたい、同時にここで培った活動を全国の皆さんとも共有していきたいと思っているのよ。オイラの旅も同じだね、これからも、たくさんの仲間とながら、生きるエネルギーを広げていくぞ!

